

# 山と博物館

第45巻 第6号 2000年6月25日

市立大町山岳博物館



「ニリンソウ」上高地徳沢にて

撮影 大石 高志

暖 — Tさんと白鳥との交流 —  
飯澤 茂雄

これは、木崎湖へ飛来した白鳥とTさんとの三シーズンに亘る交流の様子をお聞きして記したものである。ことの始まりは平成九年十一月、三羽の幼鳥が木崎湖へやって来た時からだった。湖畔に住むTさんがパン切れを与えているうちに、側へ寄って来るようになった。次の年はどうしたことが一羽だけが十月飛来した。ご主人が岸辺近くに小さな浮き板を並べてやると、その上で羽を休めるようになった。この頃にはTさんの手からえさをついばむほど慣れて来た。

三シーズン目の昨年十一月二十一日、湖心へ一羽の白鳥が舞い降りた。白鳥は湖畔に立つTさんを目掛けて真つすぐに泳いで来た。あの鳥だった！「今年も忘れず飛んで来たのかと思うと感動し、可愛い孫がやって来たよう、じーんと胸が熱くなりました」と話してくれた。Tさんは白鳥を「あずみ」と呼ぶことにした。この鳥がコハクチョウであることもその後分かった。どうしたことが「あずみ」の片目が潰れていたのだ。一人ぼっちになり、いじめられたのだろうかTさんは心配した。最初のうちは、手でえさをやっても焦点が定まらず、苦労したそうである。

この年の十二月二十七日、突然木崎湖へ三羽のオオハクチョウが飛来したが、翌朝彼らとともに「あずみ」も居なくなり、それ以来姿を見せなくなってしまった。がっかりしていたTさんに私は、「帰る時にはきつとお別れに来ますよ」と冗談半分に慰めてあげたのである。三ヶ月程が過ぎた三月二十二日、本場に「あずみ」がやって来たのだ！長い別れの季節を感じて飛んで来たと思えない。そしてTさんとの絆を確かめ合ったかのように二十九日の早朝、木崎湖を後にしたようだ。

遙かな北の大地に半年以上もの時を過ごしながら、日本への渡りの季節が巡って来ると、木崎湖畔の佇まいとともにTさんとの記憶が呼び覚まされるのだろう。渡鳥だけに不思議であり、野性との交流に温もりを感じる。近年、自然との共生が真剣に求められているが、それには私たちはTさんのように野外でじかに自然と触れ合い、自然の美しさや神秘的な営みに興味を持ち、自然を肌で学ぶことが欠かせない。また、時代が今求めているのも、子供時代に自然のなかでの遊びを通じて育まれていく豊かな感性ではないかと思う。

# 残された三人の〈字〉

## 「西糸屋」を愛された岳人の絶筆・墨跡ものがたり ①

### 奥原 教永

はじめに

上高地の山宿であるわが家「西糸屋」に係した人物三人の〈字〉が残っている。茨木猪之吉先生、松壽明さん、田淵行男先生である。三人ともすでに故人となられた。〈字〉といっても、書状、絶筆、日記、墨跡と形はさまざまであるが、そこには三人それぞれの人となりを垣間見るとともに、一人一人のわが家との固い絆、特に父母との深い縁がうかがい知れて感慨ぶかい。三人のうち、田淵行男先生以外のお二人は、私の少年時代の方で記憶は薄く、おぼろげな思い出しかないが、山岳界では忘れられない方々である。三人の〈字〉とそれの人それぞれにまつわるエピソードを紹介し、今は亡きお三方を偲びたいと思う。

茨木猪之吉先生と二枚のはがき

自由気ままな山旅をされた茨木先生は、なぜか父とは性が合ったらしく、上高地ではわが家を常宿にされていた。ところが、昭和一九年（一九四四）十月二日、奥穂高岳の穂高小屋で、濁沢小屋の「金正屋」こと、平林次男さんに見送られ、新雪の舞う白出谷を下がったまま、消息を断ってしまった。根雪のく

間温泉へ転居した。濁流の押し寄せる中で二階へ揚げた仏壇も、無事に浅間へと移った。

三十二年九月に父が他界し、初めて仏壇の小引き出しを開けると、白い包み紙に見慣れた崩し字の父の字で、東京の電話番号と相手の名前が書いてあり、中から二枚の古びた官製はがきが出てきた。二枚は昭和十九年の八月と九月のものと分かり、母に聞いて、それが茨木猪之吉先生の最期の便りで、電話番号などは搜索状況の連絡先と知った。

茨木先生の八月十日付けのはがきには、こう書かれている。

拝啓、過日はいろいろと御厄介でした。塚本閣治氏も武井真澄氏も御出での事と存じます。昨日助川氏来訪。再び御地向ふ約束をして来る十二日夜行にて出発する事に大体話も決定。島々谷から徳本峠越しにて御邪魔致す事に存じます。何れその節はよろしくお願ひします。

また九月十七日付けは、次の文面である。

四十五日雨天つづきでウンザリした。今日は久々で日光を見る。そろそろ秋晴れとなる。武井氏は出られぬらしい。助川も兵隊の方（召集令状が来て、部隊へ入営すること）で来月上旬で落ち付かぬらしい。宮坂君は都合で行くでしやう。

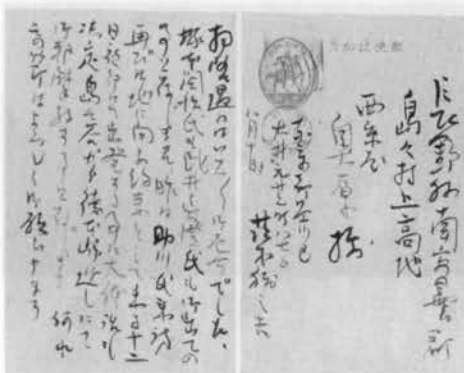
小生も二三日中に切符を入手して、絵の準備をして押し出す考へです。昨今訓練（隣組での強制的な防空訓練を指す）もやかましいです。徳本峠の紅葉もソロン口ならん。秋風立つ峠路を思い出す。

茨木先生のこの二枚のはがきに記された四人の人物を紹介しておきたい。

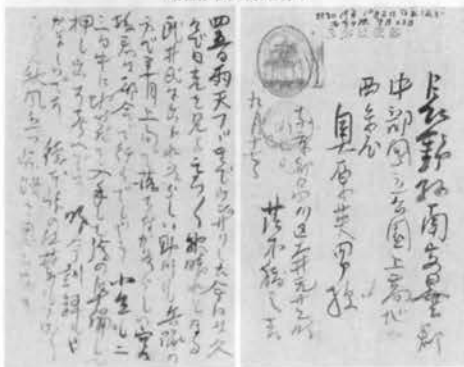
所

- 武井真澄：日本画家
- 助川善雄：明治大学山岳部員
- 宮坂 勝：洋画家

その後、時をだいぶ経た平成九年（一九九七）、わが家を囲む常連客に興味を持った中村博男さんから「関係する資料があった」と、本のコピーを送っていただいた。昭和三四年（一九五九）三月に朋文堂から刊行された茨木猪之吉著「山の画帖」の「あとがき」で、小野幸さんが書かれたものだ。



昭和十九年八月十日付け



昭和十九年九月十七日付け

茨木猪之吉先生 絶筆

「……考えてみますと、茨木さんが昭和十九年十月二日、穂高岳で行方不明になられてから今年で十五年にもなりました。わたしと茨木さんの山旅の最後は昭和十九年八月の上高地の生活でした。西穂高から奥穂にのんびり遊んで上高地において常さんの家によったわたしは、河童橋の上ではっきり茨木さんであったのです。

その夜は西糸屋で夜おそくまで、穂高岳と絵の話をしました。そして、茨木さんは翌朝早く一人で徳本峠を越して帰られました。これが、わたしが茨木さんのお姿を見た最後となつたのです。

それから一ヶ月ほどして茨木さんは最後の上高地入りをされ、穂高岳に向かわれたままになられたのでした。その最後の旅に立たれる日、茨木さんは「九月十九日の夕」と記して、大井のお宅から一葉のおはがきをわたしにだされています。

御はがき拝見、あれから（小野さんと上高地で別れてからの意）岩魚止の宿にてゆっくりと早い昼食を食い、炬辺でのびて、そろそろ出立し、途中雨になり、しかし大した事もなく早く島々駅へ四時近くに到着、すぐ電車にて松本へ。松本の友人宅へ立ち寄り一泊。

翌朝切符を求め夜行にて無事帰京。雑用多く今日までノビていたが、今夜行に初秋の上高地を再び訪ねます。松本の画友を誘ってのんびりと徳本の秋を賞しつつ行きます。秋にはまだ早いが晩夏、初秋のサビた感じがよからん。

人子もすくないでしょう。静かな溪谷は天下第一品ならん。矢張り西糸屋に根城を置きます。早々

松本の画友とは多分、宮坂勝先生と思う。

宮坂先生は昭和二十年代後半からずっと、わが家で画筆を持たれたが、わたしが知っている先生は、とても徳本峠を越されるとは想像できないお体であった。

『山の画帖』は茨木猪之吉著となっているが、「あとがき」を書いた小野幸さんが先生の遺稿を編集されたようである。小野さんは、わたしもお仲間に入れてもらっている明治大学山岳部のOB会「炬辺会」の特別会員であり、平成五年に逝去された。

茨木先生の右の三枚のはがきから推測すると、先生は九月十九日の夜行列車で新宿を出て、松本へ二十日朝に着、徳本峠を越えて上高地へはその夕方に着いたと思われる。母から「先生は二十三日にわが家を出発した」と聞いているから、濁沢へ二十三日午後には着

いていた筈だ。

その後、十月一日まで濁沢小屋で、ナナカマドの燃えさかる赤と、岩海を埋めるハイマツの緑、そこへ、うっすらと乗った新雪の白との「三段紅葉」を描いていたに違いない。二日朝、金正屋が先生の荷物を背負って白出しのゴル（鞍部）までお供をし、雪が舞い上る飛弾側の谷を下る先生を、たしかに見送ったという。

わが家ではこの最後の写生画以外も含め、数点の作品を預かって、のちにご遺族にお返しした。世話になった記念にと、一点だけいただいているが、父は「預かった絵はこれだけだった」と言って、「もう一枚くらいもらったければよかったな」と冗談で話したことがあった。

縁あって、平成十年の春、知人に依頼されて、これらのはがきについての話をかすかな思い出ながら、雑誌にも書いたが、ここに、転載したい。

「茨木猪之吉先生からの二枚の葉書

小学校六年のころから、晩秋夕暮れの道を茨木先生のザックを担ぎ、島々宿の家から旧島々駅まで先生のお供をしたことがあった。子供心に、恥ずかしい古く汚いザックだった。時が過ぎ父の他界後、仏壇の小引き出しから白紙に包まれていた二枚の葉書が出てきた。僅かの行間に美しい島々谷を描き、迫り来る戦時色を感じさせ、また懐かしいお名前も拝見できる。包みの紙の表は父の字で搜索状況の連絡先と思え、父の思い入れが偲ばれる。

この二枚を投函されて、昭和十九年九月二十日夕上高地着。父母と何を話されたか知る由もないが、二十三日濁沢へ。そして十月二

日、白出沢を下ったまま消息不明である。

今、わが家にある油絵は、偶然にも白出谷からの濁沢岳である。（平成十年六月発行、「ブルーガイド情報板・上高地・乗鞍・奥飛騨・高山」より）

茨木先生は上高地で大きい事跡を残された。

昭和十二年（一九三

七）八月に上高地の岩盤に取り付けられたウエストン師のレリーフが戦時中は外人崇拜とみなされ、翼賛壮年団や青年団の反撥をかい、金属供出の恐れがあった。それを避け、日本山岳会本部は秘密裡にレリーフを取りはずし、東京へ持ち帰ったことがあった。

後になって分かったことだが、それを実行したのは、茨木先生と「炬辺会」の交野武一さんで、十七年十二月八日、松本の石工二人と雪を踏んで現場に入り、レリーフをはずしたという（注一）。帰途、先生たちは「常さ」の小屋で合流した上糸孫人氏（注二）と留守番一人の「中の湯」で泊まったそうだ。食事のため、投網で池の鯉を捕

っている交野さんと、それを見ている「孫人氏」を描いた先生の墨絵が交野さん方で見つかった。

注一、この件については、日時、関係した人物に種々誤謬があったが、「日本山岳会信託支部十五年度」出版の折に、支那日の小林俊樹氏の絶密な調査資料に基づいて正確な記録を残すことができた。

注二、濁沢岳の頂、戦前名を懸けたガイド。  
（上高地 西糸屋 山荘）



茨木猪之吉先生筆「濁沢岳」 昭和8年8月、白土谷付近にて

## 大町と丸山彰先生

峯村 隆

はじめに

『雲の湧く峰 霧流れる谷』と題する追悼集が、多くの有志の協力によって、間もなく丸山家から刊行されようとしている。(\*)

平成一年七月二日、先生は八二歳の生涯を閉じた。本誌四四巻八号に相模一男氏が功績と人柄を概観しているのを、これを導きとしつつ、先生が残された無形の財産の大きさをこの機会に再考し、追記しておきたい。

天与の教材・北アルプス

終戦間もない昭和三三年四月八日、旧制大町中学は新制度のもとに大町南高校(現大町高)として発足した。この記念すべき年の六月三・四日に同校の体育教師だった三〇歳の先生の発案による全校登山が始まった。北は白馬から南は燕岳まで八班に分かれて、生徒は残雪の北アルプスの頂に立った。以降五十有余年にわたって今日まで連続と続いている。

第一回開催直前の大町高校新聞(六月二日付)に先生はこう語っている。「現表記筆者改筆」

「動機として私は前から大町を中心とした安曇の文化とか何とかそうしたもの、自然なかんずく山によって育まれ形づくられ我々の中に生きていて感じています。私達の心の中には山が大きな誇りとして生きています。目の前には山がある時にはさほどにも感じないのです。これをもう一度新しい広い眼で山を見直したら、そこにある美しさ深さ厳しさと言ったらよい、そういったものの偉大さに驚嘆し敬服せざるにはいられないと思います。」

大町高校の特異性といったものは山を観ること、すなわち山へ入って行って深く極めることによって生まれます。山は必ず我々に何かを与えるでしょう。こうして何とか我が校が他の学校に持たない誇りかな特性を持たせたいという気持から出発しました。確かにここから出発しない限り生きて大町南高校生と言えないと思います。

山岳に対して受けるものや山に入りて感じて育てられるものを山岳マンシップでも言いましたら、この山

岳マンシップによって日本のある一つの文化面をいけるだけのものが本校から多く生じなければならぬと思えます。とにかく山が人間に与える幾多の価値を見出してもらいたい。(中略)山に登ることは楽しいことです。自然の中にあることが伸び伸びします。

これだけでもないですが、またそれぞれの個性によって、それぞれの立場から生物、地質、文学、美術等の研究をしていたければ、より一層有意義に過ごすことができると信じています。この登山を年中行事として水続きさせようと思っています。これを当初としてよい山を真に我等の山としてこれを我が庭園の如く自分の学び舎のようにしていきたいとの事により、やがて本校にも山岳館を作りたいという希望を持って、います。この山岳館が実現すれば大町南高へ行けば北アルプスのことなら何でもわかるというような設備をあらゆる角度から研究し、山に関する限りにおいての知識は全部取り入れるように努力していきたいと、理想だけは大きく持っています。今まで恵まれた安曇から文学者も科学者も現れなかったことは不思議なことです。(中略)とにかく経験することです。そして何もかものものを、それぞれに体得し得られるなら幸甚です。」

先生は戦後の精神復興の手立てとして大町や安曇に暮らす人々のアイデンティティーの根幹たる北アルプスを各々が自ら体感して再認識し、そこから新たな地方文化発展の力を湧き起こそうとした。また、大自然によって教えられること、癒されることの真価を言葉のみならず、全校生徒に実地に悟らせようとした。これは昨今死活的の必要性が叫ばれてくる根本的な環境教育実践の先駆者といつて間違いない。

このころから大町の青年と南高生を中心とする山岳博物館創設・準備運動も盛んになる。先生も積極的に参画し昭和二十六年一月一日「南高山岳館」の理想は「大町山岳博物館」として結実したのだ。

私たちは運命的に大町や安曇に生まれ、育ち、北アルプスが存在するゆえの独特の風土

に暮らしてきた。私の同級生や後輩には三年生として最後の全校登山の後「もう山には登らない！」と宣言した者もいたが、「とにかく山で経験したこと」はそんな各人にしても、精神の良き基盤をなしていることと確信する。

北アルプスの正統派岳人の系譜

麓に暮らす山好きの使命は、山に魅せられる遠方の人々を快く山に誘うことである。それは直接の同行案内でもあり、間接の情報提供でもあろうが、人々と山で結ばれたことを喜びとし、我を押しつけず各人の山に対する姿勢を尊重し、地の利と親切とを惜しみなく提供することであろう。それが心底できる人を私は「山麓の正統派岳人」と呼びたい。

大町の登山史をひもとく時、即座にこのように岳人として思いあたるのは百瀬慎太郎と平林武夫である。

百瀬は明治二五年生まれ。周知の如く、大正から昭和前期に大町の旅館「対山館」主人として物心両面で登山者に親切を尽くすとともに日本初の山案内者組合を作り、針ノ木の沢小屋・峠小屋をも建設して北アルプスの普及に努めた人である。

平林は明治三九年松川村生まれの小学校の先生。百瀬に登山を教わり、昭和四年に大町小学校転任後本格的に山とスキーの指導に尽力するとともに、北アルプス踏査による地形図も作製する。山への情熱・独創的で卓抜した見識に加え天性のユーモアが人々を魅了し、「山の平武先生」の愛称で親しまれた。また昭和三年に大町山岳会会長として針ノ木岳慎太郎祭を興し、大雪渓では自ら神主となつて祝詞をあげた。

丸山先生は大正六年に現在の南信濃村和田に生まれ、小学一年生のころから大町に暮らした。大町小の高学年から平武先生にスキーを教わり、大町中学では当初対山館に下宿していた清水悟郎先生(旧姓片桐・後信大名誉教授)によって山とスキーに開眼した。自然、百瀬との親交も重なり、高下駄を鳴らしての

夜の対山館通いも足繁かつたという。このような大町絶好の山人環境と教職という仕事の中で、先生は著名な岳人・芸術家らの多くの知遇を得た。横有恒・深田久弥・尾崎喜八・浦松佐美太郎・福岡孝行・山川勇一郎・田淵行男・塚本開治・船越好文・内田耕作……と牧挙に暇がない。

ここで先生を私の知る限りの大町三代目の山麓の正統派岳人と呼びたい所以は、こうした山を愛する中央の人々に大町人(地元)ならではの知識と、独自の人脈と経験と家族ぐるみの誠実をもって接し、なおかつその幸を独り占めすることなく地域文化向上のために役立てた点にある。

大町南高や昭和三三年から転任した大町北高での右記著名人による講演会の企画、尾崎喜八への北高校歌作詞依頼、鹿島山荘の狩野きく能頌徳碑の横有恒への揮毫依頼、福岡孝行への新たなスキー場候補地視察や中信高校体育連盟スキー講習会創始の協力依頼などは氷山の一角として、先生の得た「良きもの」を教育・観光・産業、そして家庭の幸福にまでも……、つまりは地域の「幸せ」へと何倍にもしてフィードバックしているのである。

おわりに

丸山先生は多くの人々の心に豊かな可能性を秘めた大樹の種を蒔かれ去った。この種を芽生えさせること、あるいは芽生えた苗木を精一杯大きく育て次代に継ぐことが、私たち有志の使命である。

(丸山彰先生追悼集刊行会事務局)

(\*)追悼集は自費・非売出版

山と博物館第45巻第6号  
発行 千代田県大町市大字大町八〇五六一  
〒二〇〇〇年六月二十五日発行  
市立大町山岳博物館  
TEL 〇二六 一 二 一 二 一 二 一  
FAX 〇二六 一 二 一 二 一 二 一  
印刷 大系タイムス印刷部  
定価 年額一、五〇円(送料共)切手不可  
郵便振替口座番号 〇五七 一 三 三 三 三